

【From Kobe 2023 11月】

収録1国際情勢は厳しい混乱の時代に

今月神戸新聞 朝刊コラム「正平調」他 気になった記事から転記

- 何でもかんでも現状から目をそらし、行動せず、模様眺めの日本。
世界の場に出た政治家たちの姿に日本の方向は見えぬ、視点と判断のない今の日本の現状
世界の若者までがそれを指摘する。 世界の若者が日本で発見するリフレッシュ日本の数々。
井の中の蛙から、とびださねば・・・と。 ついばつづつです
資源のない日本が今、成長が止まる中、高齢人口の急増・物価高・成長産業の衰退に見舞われている。
経験・手本のない時代に、日本の蓄積も底をつき、行き先が見えない。
インフラのほころび・日本の成長を支えてきた企業の衰退
「今までに経験してきたことがない・・・」「自分が手を引けば・・・」の老獺言いつの横行。
若者に託して高度成長の急成長を遂げた日本。 サッカー・野球ほかスポーツに見る若者の活躍に
日本の取るべき道が垣間見える。若者に「やってみなはれ」と託す時代がきた。
そんな思いが強い11月です 勝手なぶつぶつ 皆様にはどう見えますでしょうか……
2023.11.10. From Kobe Mutsu Nakanishi

- 神戸新聞 11月1日朝刊 文化面「汀にて」鷺田 清一 より転記
＜マジョリティとはだれか＞ 強者に追随 身を潜める者

文化

ダイバーシティ(多様性)という言葉がずいぶん定着してきた。自然の生態系においても、社会の構成においても、それを構成するメンバーが多様であればあるほど、その存続が確かなものとなる。多様性のそういう考えに正面から反対する人はおそろしく少ない。そしてこの認識とともに、マイノリティの存在の尊重というモラルも多くの人の感覚に定着してきている。

わたしは薄々、マイノリティを少数者、マジョリティを多数者というふうにイメージしている。多数者の横暴から少数者の権利を擁護するべきだと考えている。そういう意味では、移民や「在日」、障害者や生活困窮者など、この社会でさまざまな疎外や差別に晒されてきた人びとこそ、マイノリティであろう。しかしマジョリティ/マイノリティの区別が、社会における多数者と少数者の区別に事なるものなのか。

先日、ふと手に取った荒井裕樹の『隠書』でたのびのび「平凡社」にその問題についての明確な視点が示されていて、霧が晴れるような思いをした。

マジョリティ/マイノリティの区別は人口比率の多寡をいうのではない。たとえば主権、貴族政治の社会で王や貴族は少数でも権力や財力は強大である。つまりマイノリティではない。女性と男性もほとんど同数なのに、社会のいかなる基準を決める上で優位な位置に立ち、より多くの機会に恵まれるのは圧倒的に男性である。

仕切る/仕切られる

このことからあきかになるのは、マジョリティ/マイノリティの区別が社会を仕切る側と彼らに仕切られる側との間だということだ。荒井はそれを「社会の中で

居心地のよさの度合い」の差だという。社会のルールや仕組みを決める側がマジョリティとすれば、マジョリティについてこの社会の居心地の悪さうはすがない。社会は彼らの意向に沿って設計されているからである。だから社会の不具合への関心は薄く、その改善への問題提起も彼らからなされることは少ない。

これまで読んでお思い起こしたのは、過日テレビで中継された(旧)ジャニーズ事務所の会見だ。関連質問を封じられた記者たちが抗議の声を上げたとき(新)副社長がこの会見をテレビで観ている子ともいえるから、ルールは守りましようよと記者たちに諭すかのように呼びかけた場を統べていたのは、会場での圧倒的少数者、つまりは訊かれる側だった。

この風景、じつは政治の中枢でいまや常態化しているものである。会見の時間制限も、事前に質問書の提出を義務つける手続きも、さらには入場券を出す報道機関など、すべてが「仕切る側」の都合で設計されている。仕切られる側は、大勢のなかにならねばならない。仕切る側は、権力をもち、側に就くとして一部の人が善悪や非難の言を、マジョリティに投げかけるのを、後者のほうで、身を潜めて見て見ぬふりをする。そういう態度ではなかつたか。

関心を持ちあう

要は、じぶんは安全な場所に引きもり、社会の不具合にかかわろうとしないのである。それは仕切る者もそれに追随する者もおなじである。

仕切っている者はたゞ謝罪せざるをえない場面へと追い詰められても「誤解を招いたすれば」とか「もし不快な思いをさせてしまったすれば」と前置きして、誤解したり過剰に反応したほうが悪いと言わねばならぬ。質問者側の問題へとすり替える。問われている問題そのものに入っていない点では、問題にかかわらないでいたい、関心をもちたがらないと思入る人もおなじである。

荒井も言っていたように、問題提起はこの社会のあり方が辛い、苦しい、不平等で悔しいという人々からしかなされない。そういう人たちの異議申し立てがなかったら、今日いわれる性差別やパワハラメントも問題として浮上してはこなかったのだ。

ホロコースト生還者、エリ・ワイゼルの言葉がけは、「愛の反対は憎しみではない。無関心だ。関心を持ちあうというこの相互のレスポンスがなくてはじめて民主主義は機能する。ちなみに「関心」(Interest)はラテン語のinteresse(入)と人とかかわりのなかに在ることから来る。

◇次回来月1月に掲載予定です。

みぎわ

汀にて 鷺田清一

強者に追隨身を潜める者

わたしたちが、1945年京都市生まれ。京都大学文学部土曜課程修了。元大阪大学経済学、前京都市立芸術大学学長。せんだいメディアアテンド創設者。専門は臨床心理学。「モノドの迷宮」(サンポート文学賞)、「二階」(文芸春秋)などの小説(岩波文学賞)など著書多数。

機関ないしは記者の取捨選択も、内閣官房側の決定に賛同側が従わなければならない約束になつていく。内閣官房長官というたつた一人のひとが、その場のマジョリティとしていわば君臨しているわけだ。彼は事務方が準備した原稿を精読するばかりか、「差し控える」といういまや流行語ともなつた回答拒否の言葉を連発する。総論としては「丁寧な説明」を認めているが、米軍兵士による暴行傷害事件が起きていると、与野議員の発言が人権侵犯と認定されても、個別の案件について政府として所感を述べることは差し控える、「コメントする立場にない」といった言い回しで質問を封じよう。

ではどうして不均衡な力関係のなかで、多くの人がはたはたに仕切られていくのか。仕切られていくのか。仕切られていくのか。大勢のなかにならねばならない。仕切る側は、権力をもち、側に就くとして一部の人が善悪や非難の言を、マジョリティに投げかけるのを、後者のほうで、身を潜めて見て見ぬふりをする。そういう態度ではなかつたか。

「知ったかぶりの友人」「息するよ
うにうそをつく」。利用が広がる一
方で、そんなふうに言い表されてい
るのは「生成AI」だ◆どんな質問
にも「分かりません」とは言わず、
ネット上のデータから答えを導き出す。珍
回答や間違いも何のその、常にこれが正解
と言わんばかり。「知ったかぶり」とは言
い得て妙◆最近、話題になったAI絡みの
ニュースといえば大阪府の「大ちゃん」。
犬のキャラクターで、AIを使ってお年寄
りの話し相手にと開発された。その大ちゃん
が大阪・関西万博について聞かれ、答え
た。「中止になってしもたんや」◆どんな
データを参考にしたのか分からないけれど
AIにそう言わしめる言葉がネット上を飛
び交っているのだろう。目玉の空飛ぶグル
マも海外パビリオンも雲行きが怪しくなっ
てきたのだから、仕方がないか◆さらに会
場建設費がどんどん膨れあがり、当初の2
倍近くに。大阪府と市、経済界は「やむな
し」と追加負担を受け入れたが、これで終
わりとは思えず◆バブルの「負の遺産」の
埋め立て地を万博とカジノで「真の遺産」
にという錬金術を思わせる計画だが、どう
なることか。AIの大ちゃんがぼやき漫才
の人生幸福師匠の決めゼリふを言う日は近
いかも。「責任者出てこい！」 2023.11.3

チャットAIのあやうさや恣意的な情報のバラマキ操作等々 高度情報化社会の闇がひそかに進行する。

「みんなで渡れば怖くない」と乗り遅れたらだめだとの話がインターネットを通して拡散。

どう整理すれば良いのか判らずのままにしているが、今日の神戸新聞のコラム正平調氏の話がよく解る。

google や旧 Face Book 等の横暴ぶりに規制強化が議論されているが、日本での現状は野放しに近い。

身近にもブラウーを使っただけの恣意的情報・偽情報そして闇サイト等々数々のおかしな事が流布されている。

EU ではインターネット閲覧者の情報を勝手に集め、恣意的な情報を送り付けることの規制強化に舵を切った。

日本ではすぐビジネスに乗り遅れるという論が恣意的に拡大するが、何とかならぬか・・・

TV までもが、肯定的な取り上げ方でルポと称してばらまきに参加と見える。

インターネットがますます便利になって 規制のベースが定まらぬまま悪の巣窟になって、日に日に犠牲者が闇の中に引き込まれる現状。危険予知でもよく言われる「まずフェイルセーフ安全側へ倒して」から議論することも大事。もうそんな段階にきているとみるが・・・。

この膨大な偽・恣意的情報を使う操作ビジネスの拡散に目を向けなければ、

高度通信社会の崩壊をもたらすと・・・。

2023.11.4. From Kobe Mutsu Nakanishi

■ 最近の新聞などを読んでいて感じること

【理念からの原点復帰 一致点を説いて回る論客はいないのかと】

最近の正平調氏の話を読み、今の混乱の世相に 一致点を説いて回る論客はいないのかと

◆ 伝統を守ることの重要性和革新 今を生きるためにどうすればいいのか・・・

◆ ロシアの侵略／ウクライナ & イスラエルの侵略／パレスチナ それぞれ言い分がある。
両方がテーブルにつく一致点はどこにあるのか・・・

我々だって、日頃耳にするのは西側の情報ばかり… これが正義といえるのか・・・

日本政治だって 数頼み・仲間頼みのその場対応・丸投げ政治 これて良いのか・・・

基本を忘れ、即物的な対応ばかりでは、永遠に一致点は見つからぬ。

原点に戻ってというが、緒方貞子さんの言葉が心に響く

「守らねばならぬ命」 いま こんなことを言うと叱られるかもしれないが、これが原点回帰の基本か・・・

話のすれ違い等々は 周りでもいつもこんな事が起っている。

何を大切にせねばならないのか・・・疑心暗鬼ではいつまでたっても言葉遊びの域と。

今必要な一致点を説いて回る論客はいないのかと・・・

2023.11.1. from Kobe Mutsu Nakanishi

■ 2023.10.25. 神戸新聞「正平調」より転記

きょうもまた、世界の何処かで「愛国の華」が散っているのかもしれない

正平調 戦前のギリコのおまけに「肉弾三勇士像」というのがあった。1個5銭のキャラメルに引換券がつき、集めた枚数に応じておまけの景品と交換できた◆日本軍と中国軍が衝突した1932（昭和7）年の上海事変で日本兵3人が爆弾を抱えて敵に突入し、爆死した。軍は「覚悟の自爆」とたたえ、新聞が賛美して教科書にも載った。増子保志さんの「創られた戦争美談」（日本国際情報学会誌）に詳しい◆物語と精神論に酔い、命を軽んじる風潮はその後の神風特攻隊につながった。79年前のきょうは、海軍の戦闘機がフィリピンのレイテ沖で米艦隊に初めて体当たりした日。日本人が忘れてはいけない一日である◆今年は学徒出陣から80年の節目でもある。特攻も学徒出陣も敗色が濃厚になった末の決断だった。兵士と兵器の不足を若者の命で補おうとしたとはもはや正気ではない◆かつて特攻で大切な学友を亡くした作家は書いている。「悲痛なのは、その屍に彼の本質とはまったくかけ離れた『愛国の華』という冠詞がつけられたことだ」（新潮文庫「司馬遼太郎が考えたこと1」より）◆きょうもまた、世界のどこかで「愛国の華」が散っているのかもしれない。進歩のない人間に嫌気が差すが、それでもNOと言いつつ続けねば。 2023.10.25

■ 2023.10.18.神戸新聞「正平調」より転記

人口減少が止めがたい今 趣旨をそこなわぬよう、できる形を模索してもよいのではないか。
で祭りのバトン代々つないできた先人たちも、なくなるよりそちらの方を望むはずだ。

正平調 「あー!」。屋台が傾く。見つめる観衆からどよめきが始まる。腹に響く太鼓の音が続く練り場は、氏子らで立すいの余地もない。地区ごとに色の違うシデ棒が生き物の群れのように動き、複数で練り合わせる屋台を後押しする◆風が冷たさを帯び始めた14、15日、播磨の秋祭りのハイライト「灘のけんか祭り」で知られる、松原八幡神社（姫路市白浜町）の秋季例大祭が催された◆新型コロナウイルス感染症の5類移行後、初のけんか祭り。週末でもあり、例年以上の老若男女が詰めかけた。「やっと普通に帰った。人が多い方が気合も入る」。締め込み姿の30代男性は、いとおしそに屋台を見つめた◆だが華やかなけんか祭りの一方、コロナ禍を経て郡部の一部の祭りはひっそりと姿を消しつつある。人が減り、数年ほどの中断が引き金になった◆たつの市新宮町平野地区の秋祭りは、これまで長らく子どもだけのちようちん行列が続けてきた。少子化のため今年は大人が加わると、図らずも半世紀ぶりに戦前からの伝統的な形に戻った◆人口減少は止めがたい。ならば祭りの趣旨を損なわぬよう、今できる形を模索してもいいのでは。祭りのバトンを代々つないできた先人たちもきつと、なくなるよりそちらの方を望むはずだ。 2023.10.18

神輿激突 響くごう音 姫路・灘のけんか祭り本宮



播磨を代表する祭りの一つで、「灘のけんか祭り」と呼ばれる松原八幡神社（姫路市白浜町）の秋季例大祭は15日、本宮を迎えた。秋晴れの下、3基の神輿が激しくぶつかり合う名物の「神輿合わせ」が披露され、練り場のあるお旅山を埋めた観衆が見入った。

（22.23面に写真グラフ）

旧灘七方村（地区）のうち、祭りを取り仕切る「年番」が神輿を担ぐ。午後2時過ぎ、本場地区の氏子とともに神輿がお旅山の練り場を走り、待ちわびた見物客から歓声が上がった。神輿は激しくぶつかり合うほど神意がなるとされる。「バキッ」「ドスン」。衝突のたびにう音が響き、屋根がきしむ、装飾が飛び散った。男たちの威勢のいいかけ声が、すり鉢状の舞台にたまし続けた。

他の6地区もお旅山に集まり、自慢の屋台を練り合わせた。（森下陽介）

3基の神輿を激しくぶつかり合う本場地区の氏子たち。15日午後、姫路市白浜町撮影・笠原光恵

NEWSPRING 2023.10.18